

双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜

西村俊範

【要約】 二世紀後半以降の代表的な鏡の型式として、通称位至三公鏡がある。本稿ではこの鏡の正文様が、胴体の両側に龍頭を一個ずつつけた双頭龍文であり、文様を細かく分析すればそこに龍文がくずれてゆく文様変遷の過程を辿りうる事を明らかにし、あわせて、この文様変遷の過程が初現から終末まで二世紀のうちに含められる事出土例より考証した。

また日本出土鏡の考察を合わせて行ない、弥生出土鏡が早期の型式のものに限られる事から、弥生出土鏡と古墳出土鏡の型式差の境界が、この鏡においては二世紀後半にあると推定した。最後に、以上の分析に基づいて、この鏡の名称を双頭龍文鏡と改める事を提唱した。

史林 六六卷一号 一九八三年一月

一 はじめに

獸首鏡・夔鳳鏡と並ぶ平彫り文様表現系の鏡として、俗に位至三公鏡の名で纏められる鏡の一群がある。二世紀後半から三世紀にかけては神獸鏡と並んで時代を代表する鏡の一つであったと考えられ、その持つ意義も見かけの直径ほどには小さくない。

ただこの鏡はその最も整った文様表現のものに極めて多様性があり、獸首・夔鳳両鏡との合の子的性格のものが生じていたりして纏めて促える事がかなり難しく、その上に、最も多く製作されたと思われる型式が実は最も便化した文様のものであったという特殊事情が重なった為か、従来他鏡に比べてあまり細かい詮索が行なわれていなかった^①。家常貴富鏡と並んで、銘文を鏡名として残す数少ない例となっている事にも、その間の事情が端的に示されている様に思われる。

但し、銘文を鏡名とする事は、「内区主文様をもって鏡式名の主要部分とする」大原則にはずれるばかりか、現実的にも学問的に無用の混乱を生じる原因にもなりかねない^③。そこで本稿では、この鏡に対して改めて基礎的な分析を加えて、分類・文様分析・編年・性格づけを行ない、合わせて日本出土鏡の分析にも説き及んでみたいと考えている。その上で最終的には、分析の結果に基いて、従来位至三公鏡と呼称されてきたこの鏡の鏡名変更を提唱する事を目ざしている。

① 従来への理解の程度については以下を参照されたい。

樋口隆康「位至三公鏡」『図解考古学辞典』（東京、一九五九年）四

二・四三頁

樋口隆康「位至三公鏡」（世界美術小辞典、東洋編・中国考古）

『芸術新潮』一九七四年三月号（東京、一九七四年）

樋口隆康「鏡鑑」『漢代の美術』（東京、一九七五年）二〇七頁

樋口隆康「鏡鑑」『六朝の美術』（東京、一九七六年）一九五頁

樋口隆康「双頭龍鳳文鏡」『古鏡』（東京、一九七九年）二〇五～二

一〇頁

二 分 類

鏡背の文様配置と、主文である双頭の動物文の様相に基いて三型式に分類する。

I 式（第1図—1）：外周より、幅広の素縁・凹帯・一二前後の連弧によって構成される連弧文帯がある。内区は鈕を間と挟んで縦に長い銘帯によって二分される。胴体の両端に龍・鳳・龍以外の獣の頭と判断できるものを一つずつつけた双頭の動物文と言わなければならない。銘帯には長宜子孫・君宜高官などの銘を片側に四字ずつ又は三字ずつ入れる。位至三公銘は管見の限り例が無い。直径一二～一三cmの例が多い。

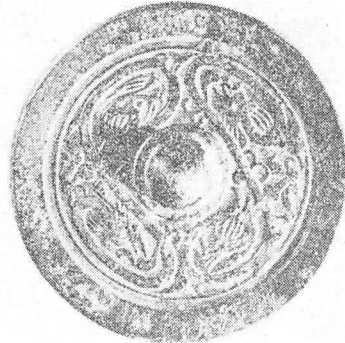
西田守夫「位至三公鏡」『世界考古学事典』上（東京、一九七九年）六三頁。

② この点、森浩一氏が仿製の小型内行花文鏡をもって「小型斜行栴檀文帯鏡」と命名されたやり方には、たとえそれが便宜的なものであっても同意できない。森浩一「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攻』（東京、一九七〇年）二六一頁

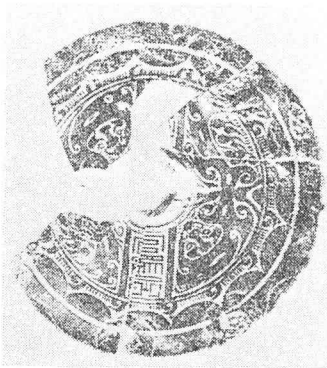
③ 中国では既に混乱を生じた例がかなりある。個々の発掘報告では数知れない。



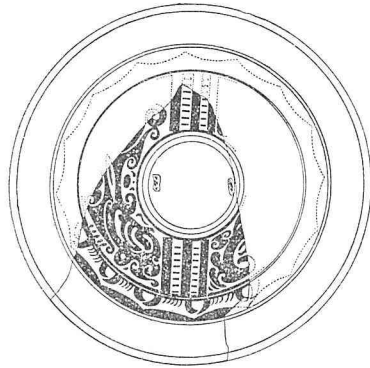
1（京都国立博物館蔵）



2（洛陽旋溝 146 号墓）



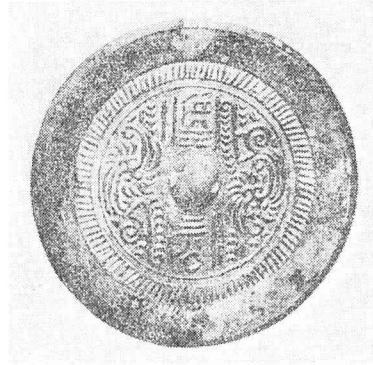
3（大同江面助王里）



4（石ヶ坪箱式石棺）



5（梁上椿旧蔵）



6（梁上椿旧蔵）

第1図 双頭龍文鏡（位至三公鏡）の各型式

I式の鏡は一応この様な基本のパターンを持つが、他にも、基本パターンをはみ出すものや、獸首・夔鳳兩鏡との合の子的なものが数多く存する。洛陽市燒溝一四六号墓出土鏡^①（第1圖-2）や西安北郊徐家灣F・T・一〇第三号漢墓出土鏡^②は連弧文帯と銘帯が無く、山中商会旧蔵鏡^③は銘が連弧文帯と主文様の間に分散して入り、独自の銘帯が無くなっている。

一方、朝鮮の平安南道大同郡大同江面助王里出土鏡^④（第1圖-3）や福岡県京都郡犀川町山鹿石ヶ坪二号箱式石棺出土鏡^⑤（第1圖-4）・古鏡図録収載鏡^⑥は文様そのものに獸首鏡との関連が強く考えられ、慶応大学蔵鏡^⑦・早稲田大学蔵鏡^⑧・小校経閣金文拓本収載鏡^⑨などは夔鳳鏡（特に單鳳鏡）との関連が考えられる。この類はあるいは別個に扱った方が良いかもしれない。

Ⅱ式（第1圖-5）…外周より幅広の素縁・斜行櫛歯文帯・二本ないし三本の界圍線に続いて内区が入る。界圍線のうちの一本がかなり幅広に表現される特徴がある。I式同様、鈕を間に挟んで縦長の銘帯があり、内区を二分している。銘帯の両側もかなり幅広の線で仕切られる。銘は片側二字ずつの例が大部分で、片側3字ずつの例が若干ある。位至三公が大部分を占め、君宜高官が若干ある。長宜子孫は例を見ない。

内区の双頭の動物文の描き方にも一つの決まったパターンができ上り、I式のような文様の多様性はない。胴体は幅広の線でS字状に描かれ、その中央付近の両側に葉状の突起がつく。動物の頭はかなりくずれており、確実に龍と判別できるものも多い反面、龍以外の獸・鳳と判断しうる例が認められない。片方の頭は胴体から切り離されて独立の様相を示す。細かいコマ状の地文が入る。鈕座は円座が大部分を占める。直径九〜一〇cmの例が多く、I式より小さい。

Ⅲ式（第1圖-6）…外周より幅広の素縁・斜行櫛歯文帯・二本の細い界圍線と続く。Ⅱ式にほぼ等しい。内区もⅡ式と同じ文様構成法で描かれて大差がないが、銘帯両側の仕切り線が細くなる事・双頭動物文の胴体の線が細くなる事がⅡ式と異なる。動物の頭も完全にくずれた表現になっている。そのくずれ方にもやはり一つのパターンがあり、Ⅱ式の段階で胴体から切り離されていた側の頭は、漢字の風冠（かざかんむり）形に似た形（以後風冠形と称する）になり、もう片方

の頭は胴体の末端から細線が二〜三本ひろひろと出ただけの形に変わっている。また、鈕を挟んで対称の位置には必ず同じ形の頭を置き、一つの胴体の両側には必ず異なる形頭の頭を描くという原則がきちんと守られている。

銘は位至三公が圧倒的で、君宜高官が若干見られる。銘の字数が鈕の両側を合わせても二〜三字と少なくなるものがあり、至三公・高官・三公などの例が出てくる。直径七〜八cmの例が多く、手鏡として使用しうる限度に近づいている。

- ① 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』（北京、一九五九年）図版四五―三、図七七―二、洛陽市文物管理委員会『洛陽出土古鏡』（北京、一九六〇年）図版八七
- ② 陝西省文物管理委員会『陝西省出土銅鏡』（北京、一九五九年）図版六一
- ③ 梅原末治『欧米蒐儲支那古銅精華』鏡選部一（大阪、一九三三年）図版七六、後藤守一『古鏡聚英』上編（東京、一九三五年）図版三五―一
- ④ 梅原末治『鑑鏡の研究』（東京、一九二四年）第四七図、梅原考古資料朝鮮之部九一五
- ⑤ 小田富士雄「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』第二〇号、（大阪、一九五九年）第6図一
- ⑥ 羅振玉『古鏡圖錄』（一九一六年）卷下、一葉右、樋口隆康『古鏡』（東京、一九七九年）図九一右
- ⑦ 三田史学会『江南踏査』（東京、一九四一年）図版二九下
- ⑧ 毎日新聞社『会津八一コレクション』中国漢唐美術展』（東京、一九七四年）鏡四五
- ⑨ 劉体智『小校經閣金文拓本』（一九三五年）卷一六、一五葉左

三 文 様 分 析

前節では通称位至三公鏡を内区主文と全体の文様構成に基いて三型式に分類してみた。しかし、これのみでは型式相互の連関は未だ明白にならない。特にⅡ・Ⅲ式の如きくずれた獣の頭部を持った文様は、それが抽象図案ではなく動物文様である以上、必ずその原形となる形が存在するはずであり、その原形からのくずれを克明に追ってゆけば、文様便化の全過程が辿れるはずであろう。

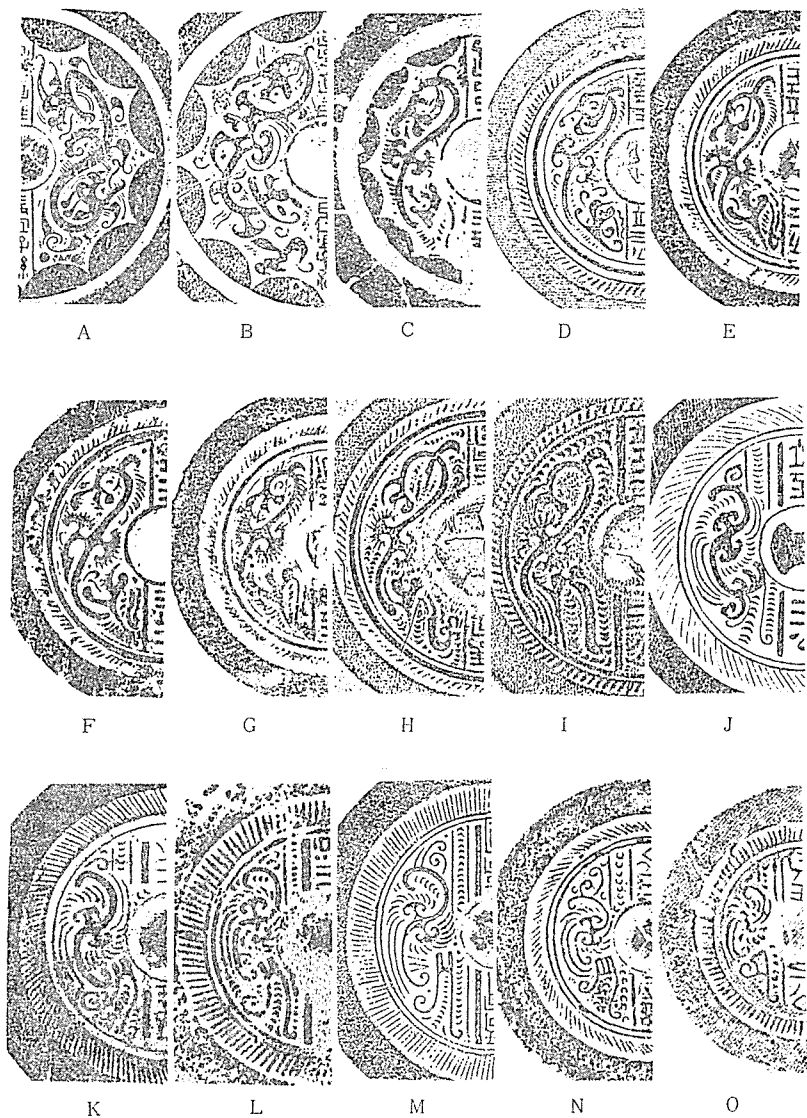
第2図は、内区主文の半分、すなわち双頭の獸文一単位をピックアップして、文様便化の過程を辿れるように配列したものである。

Aは最も表現の明確な、原形になる形のものである。中央にS字状の胴体があり、上に明瞭な角の表現を持った龍（以後有角龍と称する）、下に明瞭な角の表現が見当たらない龍（以後無角龍と称する）の頭がある^①。B以降は胴体の曲り方は同一だが、龍の頭の向きがAとは左右逆になる。この為に上の有角龍の角は、自身の胴体と交差する形になっている^②。

以後も有角龍は常に図の上部に配置してある。C・Dでも角の表現のうち、自身の胴体までの部分は二本の平行線で明瞭に表現されている。E・F・G・Hの段階では、胴体を越した部分（つまり角の先端部の方）は明瞭に残っているもの、胴体より手前の部分の方は途切れて痕跡のみになり、Iの段階ではついに消滅している。このB～Iの変化の過程では角の変化のみならず、有角龍の額・上顎・下顎に相当する部分の表現も次第に形をくずしていついていく。後頭部を抉り取った様に表現する特徴が共通している。

Jの段階では龍の頭と覚しき表現は全て無くなっている。胴体先端が名残りを止めるように若干膨らみ、角の先端部の名残りは蔽手状に巻いた線が胴体から派生する形で辛うじて残っている。龍頭の表現がこの様に極端に省略されて小さくなってしまった為に、銘帯寄りの部分に別の文様で埋め合わせをしなければならない程のスペースができてしまったのであろう。J～Nに共通する現象として、コマ文を縦一列に連ねた文様を二本の直線で挟んだ文様が見えている。M・Nでは角先端の名残りの蔽手状線にもう一本別の蔽手状線が加わって二本になっている。文様の原義がすでにわからなくなっていたと思われる。Oではその蔽手状線自体もはや描かれていない。

次に下の方の無角龍の方の変化を追ってみたい。B・C・Dでは龍頭の表現はきっちりとなされているが、早くも後頭部を抉り取った様に表現する有頭龍と同様の特徴が出ている。C・D・Eでは頭上の二本の突起が先端がふくらまずに全て細線で示されるようになり、このうちの一本が後頭部に長く延びて、下顎の延長にあたるもう一本の細線と共に後の風冠形の原形になる形をこしらえている。F・G・H・Iと次第に額・上顎・下顎にあたる部分が便化してゆく趨勢が有角龍と同様に認められるが、こちらは有角龍の場合とは異なって、J・Kの段階に至ってもその表現は幅広の線できっちり



第2図 双頭龍文の文様変化

残されている。K・Lの段階では下顎の名残りは胴体の先端部を若干それらしく表現する事によってまだ表わされているが、M・Nの段階ではそれも消滅し、風冠形が胴体から完全に独立する格好になる。

風冠形自体も、当初はK・L・Mの様に額・上顎の名残りが風冠形の上に残っているが、N・Oのようにそれすら省略されるものが最終的に出現する。

以上を総括してみれば、A～Oに至る一連の文様変化は、有角龍・無角龍各一を胴体の両端につけた双頭龍文の一方的文様便化の過程として捉える事ができよう。有角龍側と無角龍側の文様便化はその仕方が異なるものの完全に同時進行していると言いうるものである。従って、この式に属する個々の鏡も、細かい吟味を行なえば第2図のいずれのレベルに相当するかを確認する事が可能ならずである。ただ、あまりに細かい段階づけは、錆や破損の為に不可能な例が多く、全ての鏡をこのレベルで論じる事には現状では無理がある。ここでは型式相互間に大きな流れが存する事を把握するに止めた

い。
ちなみに、第2図のうち、A～Cは先述の筆者分類のⅠ式、D～IはⅡ式、J～OはⅢ式に相当する。従って、この三型式の変遷順がⅠ→Ⅱ→Ⅲの順である事を文様変遷の上で確認し得た事になる。このように変遷順を確定すれば、この式の鏡には主文様の便化以外にも、直径が漸次減少する事・銘の字数が減少する事・界圏線が二本（内一本幅広）→二本（内一本幅広）→二本（共に細線）又は一本と変化する事といった、主文様の便化に相応じた一連の省略的な変化が起っていた事が確かめられた事になろう。

先述した様に、Ⅰ式の中には龍以外の獸・鳳を頭とするもの、文様配置パターンが第2図ⅠA～Cとは異なるものも含まれていた。しかしその類は以後の一連の変化の中には全く見出す事ができず、変化を辿りうるものは、すべてB・Cと同一の文様配置を持った双頭龍文を主文様とする鏡に限られている。B・C以外のスタイルのものは、初期の段階で淘汰されたものと見なす事ができよう。

① 無角龍の頭上にある先が球状になった二本の突起は何を表現したもののなか実によくわからない。耳の表現ではないし、龍の角の表現は、角らしく先端を尖らすものが普通と思われる。ここでは、二つの頭を区別して呼称する事のみを第一義としていたので、とりあえず有角龍・無角龍としたが、あるいは双角龍と独角龍とすべきものなのかもしれない。I式にも東京大学工学部成鏡（京都大学人文科学研究所考古

四 中国出土例

前節においては、文様変化の過程を追う事によって、この式の鏡にI→II→III式の変遷順がある事を明らかにした。本章では中国出土例を検討する事によって、各型式の実年代を探ってみたい。

I式の出土例は六例ある。

- ① 河南省三门峡市劉家渠八号墓^①
- ② 河南省洛陽市燒溝一二〇号墓^②（第2図―B）
- ③ 同右 一四六号墓^③（第1図―2）
- ④⑤ 湖南省常德市東江公社一号墓^④ 二面
- ⑥ 天津市武清県高村公社鮮于墳墓^⑤
- ⑦ 湖南省郴州市馬家坪六朝墓^⑥（第2図―C）

①は追葬が考えられる未盗掘墓で、墓室は燒溝V式。伴出の陶鐘が、腹部が算盤玉状に張り出す新しい型式のものであり、追葬の最終年代は二世紀後半と考えられる。鏡自体は、銘帯が無く、龍鳳の頭二つずつを描いており、第2図の文様変遷の上には乗らない。

資料一五四四）の様、共に先の尖った角の表現を持つ双角龍と独角龍を胴体の両端につけた例がある。

② この有角龍の表現には、胴体部に夔鳳鏡（單鳳）の影響がある。
③ 第2図―Bの無角龍の頭の下にあるのは足先の表現であって頭ではない。同じI式の山中商会旧藏鏡にも見える。第二節註③参照。

②③の洛陽燒溝一二〇・一四六号墓は、報告では一二〇号墓が四期又は五期、一四六号墓が五期に入る。一二〇号墓は陶壺の形式からみて確かに二世紀前半までの墓であろう。^⑦一四六号墓も同様二世紀前半と思われる。鏡は②が第2図―Bそのもの、③は銘帯・連弧文帯が無く、龍鳳の頭二つずつを持つ。

④は多室磚墓の形態を取る。追葬が考えられるが、最終の追葬も二世紀後半を考えておけば問題無い。出土品の中に「索左尉印」の銘のある滑石製印章明器が出ている。『後漢書』郡国志四（志第二十二）によれば、武陵郡索県は陽嘉三年（A. D. 134）に漢寿県と改名されている。従って鏡にも二世紀前半の埋葬品の可能性があり、陶器の中にも二世紀前半としておかしくないものが含まれている。鏡はI式二面で、文様のには第2図―C・Dのレベルに相当する。

⑥の鮮于瓚墓は墓主が延光四年（A. D. 125）に卒し、墓碑が延熹八年（A. D. 165）に建てられた事が、墓誌・墓碑各々の銘文から確認できる。報告は墓の年代を建碑年代以前としか述べていないが、遅く見積っても二世紀中頃以前と考えておけば問題ない。鏡そのものは、一二連弧・片側四字銘を持ち、片方の龍頭が見える。第2図―Bのレベルに属する。

以上を綜じてみて、I式は⑦の例が三世紀に下る他は、①④⑤が二世紀後半、⑥が二世紀中頃まで、②③が二世紀前半と、いずれも二世紀代の後漢墓より出土している事が明白になった。特に②③の様に二世紀前半に入ると思われる墓よりの出土例はこの鏡の初現の考察にとって重要になる。

第二節に述べた様に、I式の中には獸首・夔鳳兩鏡との関連が色濃い例がある。獸首鏡・夔鳳鏡は共に元興元年（A. D. 105）の紀年鏡があり、神獸鏡と共に二世紀初頭に出現していた事がすでに確実になっている。^⑧従って、同じ平彫り文様系の双頭龍文（位至三公）鏡I式が、時代的に前後どちらにウエイトを置いて考えるかは別として、二世紀前半の枠内で既に出現していたと考えても、別段無理を生じる点は何も無い。

II式の出土例は三例ある。

⑧ 江西省瑞昌馬頭西晋墓^⑨

⑨ 湖北省隨縣唐鎮三號墓（第2図―E）

⑩ 河南省洛陽市晉墓^⑪（第2図―G）

⑧は少量の古越磁を出土している。回転斜格子紋・円文・貼り付け犧首、ないしその三者の組み合わせによる装飾を持つものが少量しかなく、神亭も古手である点から見て、吳代（三世紀の第二又は第三の四半世紀）に入ると思われる。鏡は第2図―Fのレベルに近い。

⑨からは、古手の古越磁四耳罐二つ、陶製動物明器類多数を出土している。報告は三国代とするが、現在の知識からすれば東漢晚期（二世紀後半以降）に年代を上げうる可能性がある。鏡は第2図―Eそのものである。

⑩は古い報告で年代の再確認はできそうもない。鏡は第2図―Gそのものである。

Ⅱ式も⑨の例によって、東漢晚期に既に出現している可能性を考えうるが、前後のⅠ・Ⅲ式の実年を勘案すると、あまり役に立つ資料になるとは思えない。

Ⅲ式の出土例は一〇例ある。

⑪ 遼寧省瀋陽市伯官屯^⑫

⑫ 河南省洛陽市西郊三一七七号墓（第3図）

⑬ 河南省洛陽市晉墓^⑭

⑭ 河北省石家莊市橋東^⑮

⑮ 河南省三門峽市劉家渠一〇七号墓（第2図―M）

⑯ 同右 一二〇号墓^⑰

⑰⑱ 陝西省西安市西郊緯十三街13^号一号漢墓^⑲ 二面

⑲ 山東省蒼山県元嘉元年墓^⑳

⑳ 湖北省房県二龍岡二号墓^㉑

⑫は四出五銖を伴出しており、洛陽西郊漢墓の中では最も時期の下る墓とされる。東漢晩期にあてうる墓であろう。鏡は第2図―Oと同じレベルの最末期のスタイルにあたる。

⑳は盜掘のひどい墓で陶罐一、弩機一しか伴出物がない。墓磚に「本初元年(A. D. 146)」の紀年があるが、これは古物の再利用と思われる。いずれにしても、報告の述べる様に東漢墓と思われる。鏡は第2図―Mに最も近い。

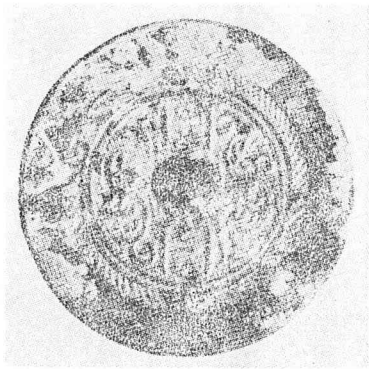
この他、⑪・⑮・⑯・⑰・⑱もいずれも東漢墓の出土と報告されているが、

報告が不備で再確認ができない。鏡としては、⑪は第2図―Mに近く、⑮はM

そのもの、⑯はJ・Kなどをかなりいびつにくずしたものでレベルを言いにくい。⑰はJのレベル、⑱はLのレベルにあたる。Ⅲ式の中でも最末期のスタイルに属する⑫が東漢晩期と考えられる墓から出土している事が、この鏡式の一連の文様変化が東漢代のうちにすべて終束していた事を示すものとして重要であろう。

以上、中国出土鏡各例について、その出土した墓葬の年代を中心に考察した。現在の水準からみて、フルに活用しうる報告が少なく、決して満足のゆく分析ができたとは言いが、Ⅰ式の初現が二世紀前半、文様变化的に終末期に属するスタイルのⅢ式が東漢代のうちに既に出現している事が確認できた。従ってⅢ式自体の初現もまず二世紀後半の内にあると思われる。このことから、出土例からは確認を取れなかったものの、Ⅱ式の初現年代もⅠ式・Ⅲ式の間期の時期、ごく常識的に考えて遅くとも二世紀後半内にある事は間違いないものと思われる。この式の鏡の文様変化は、遅くとも東漢代いっぱいには終束していたと言いう事ができる。

また、これは若干不思議に感じられる現象ではあるが、この式の鏡の游離資料を広く収集してみると、文様の整ったⅠ



第3図 洛陽西郊3177号墓(Ⅲ式)

・Ⅱ式よりも、くずれたⅢ式の資料の方が圧倒的に数が多い事にすぐ思い至る。従来Ⅲ式の鏡がこの鏡式を代表するものとして、その代表銘である位至三公を冠して取り扱われていたのも決して故なしとしない。その文様の完整期とその製作の最盛期がずれたために、最も多く製作されたものが、文様のには最もくずれたⅢ式になったものと思われる。その製作上の最盛期は二世紀後半から三世紀前半を考えておきたい。

一つ注意しておきたい問題に出土地がある。現在までの出土例は僅かに二〇例に過ぎないが、湖北省北部出土の二例（①）・②を南方に入れても、その出土地は一五対五と圧倒的に北方に片寄っている。特に揚子江下流域からの出土例が今の所無い事がより一層北方系という印象を強くしており、これほど北方系という印象の強い鏡も実に珍らしい。これは出土例からも南方系という色彩が強く出ている神獸鏡・獸帶鏡とは極めて好対照と言える。

そののみか、文様の面でもこの式の鏡と神獸鏡（特にその中でも最も数量の多い環状乳神獸鏡）は好対照を示している。環状乳神獸鏡が元興元年（A. D. 105）の紀年鏡が示す様に二世紀前半に出現し、延熹二年（A. D. 159）、永康元年（A. D. 167）の紀年鏡を経て、永康元年・中平四年（A. D. 187）の紀年鏡で最も完成されたスタイルが整い、二世紀後半・三世紀前半の一世紀にその製作上・文様上の最盛期が同時にあったと思われるのに対し、一方の双頭龍文（位至三公）鏡はその出現時期と最盛期を前者と一にしながらも、その製作上の最盛期に製作された鏡が文様の整ったものではなく、最も便化した型式のものであった点に大きな違いを生じている。両鏡が北方・南方を代表する鏡である事を考えれば、これが二世紀後半以降の北方・南方の鏡製作の現状をかなり端的に暗示しているものと考えられるのである。

- ① 黄河水庫考古工作队「河南陝縣劉家渠漢墓」『考古學報』一九六五年第一期（北京、一九六五年）圖三六一—四
- ② 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』（北京、一九五九年）圖七六一—二、圖版四五一—四
- ③ 同右、圖七七—二、圖版四五—三
- ④ 湖南省博物館「湖南常德東漢墓」『考古學集刊』第一集（北京、一九八二年）圖九一—二、六
- 元の陝縣の行政区域のうち、三門峽水利工事に伴って作られた新市街地が一九五七年に三門峽市として陝縣から独立している。劉家渠・上村嶺の二地点も三門峽市に含まれている事を現地を確認した。

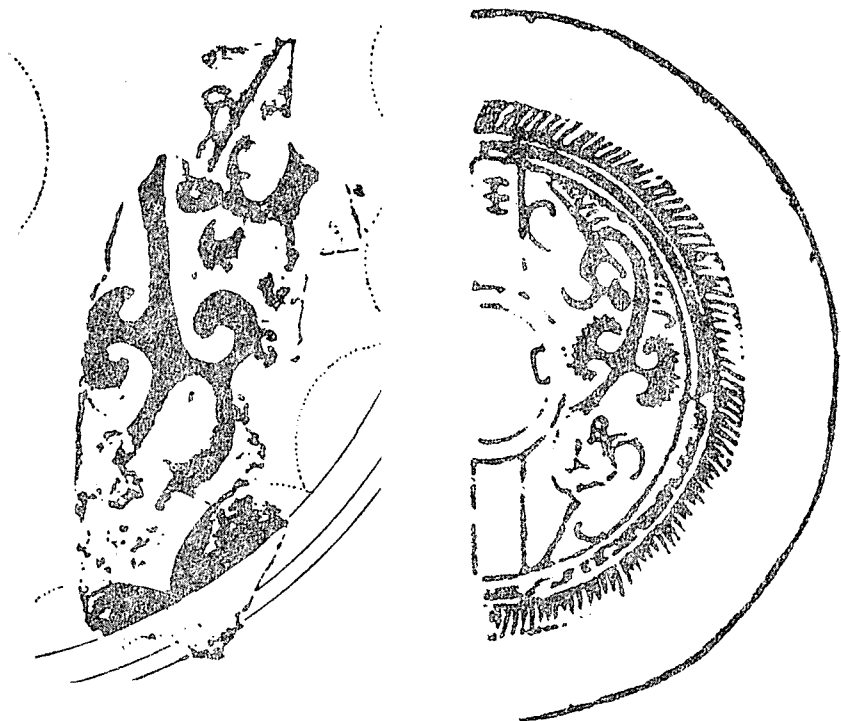
- ⑤ 天津市文物管理处考古隊「武清東漢鮮于瑒墓」『考古學報』一九八二年第三期（北京、一九八二年）圖版一九六
- ⑥ 張中一「湖南郴州市馬家坪古墓清理」『考古』一九六一年第九期（北京、一九六一年）圖二一一
- ⑦ 高倉洋彰氏はこの墓出土の鏡を、馬場山四一a号土壙墓出土鏡の類鏡として挙げ、「後漢の末期（燒溝第六期）に比定されている。」と述べておられるが、誰が比定したにせよ事実と反している。高倉洋彰『鏡』『三世紀の考古学』中巻（東京、一九八二年）二二〇頁。洛陽燒溝漢墓は確かに作り過ぎた報告書ではあるが、二〇号漢墓及びその出土鏡の年代が報告中で混乱している事実は認められない。高倉洋彰「弥生時代の鏡とその年代」『考古学ジャーナル』一九八一年一月号（東京、一九八一年）一〇頁
- ⑧ 拙稿「紀年銘漢式鏡一覽表」（未刊稿）に述べてあるので参照されたい。
- ⑨ 江西省博物館「江西瑞昌馬頭西晉墓」『考古』一九七四年第一期（北京、一九七四年）圖六一二
- ⑩ 湖北省文物管理委员会「湖北隨州唐鎮漢魏墓清理」『考古』一九六六年第二期（北京、一九六六年）圖六一二。隨州の市街地は一九七九年に隨州市として独立している。唐鎮は現在の所どちらに帰属するか不明なので旧来の地名を踏襲した。ちなみに、中国の行政区画は年四回変更され、新聞に発表される。毎年発行の民政部編『中華人民共和國行政区划簡冊』が前年までの変更を纏めている。
- ⑪ 河南省文化局文物工作隊二隊「洛陽晉墓的發掘」『考古學報』一九五七年第一期（北京、一九五七年）圖一〇一三、圖版四一—一左
- ⑫ 洛陽市文物工作組「洛陽伯官屯漢魏墓葬」『考古』一九六四年第一期、（北京、一九六四年）圖版三一—一〇
- ⑬ 中国科学院考古研究所洛陽發掘隊「洛陽西郊漢魏墓葬報告」『考古學報』一九六三年第二期（北京、一九六三年）圖版七—七

- ⑭ ①に同じ、圖一〇—一二、圖版四一—右
- ⑮ 孟浩「石家莊市橋東單室磚墓」『文物』一九五九年第四期（北京、一九五九年）圖三、この墓からは大泉五百を伴出しており、報告に言うような後漢晩期の墓ではあり得ない。
- ⑯ ①に同じ、圖三六一—
- ⑰ ①に同じ、圖三六一—三
- ⑱ 第二節②に同じ、圖版六九—七〇
- ⑲ 山東省博物館・蒼山縣文化館「山東蒼山元嘉元年画像石墓」『考古』一九七五年第二期（北京、一九七五年）圖版二一一—二
- ⑳ 湖北省博物館「湖北房縣的東漢・六朝墓」『考古』一九七八年第五期（北京、一九七八年）圖五
- ㉑ 例を写真・拓本を参照しうるものに限定しての話である。記載からこの式の鏡の可能性が推測できるものも多いが、この鏡の特殊事情を考えて利用していない。その類を含めれば分布は更に北方に片寄る。例えば、河南省舞陽縣出土鏡など。建築史專輯編輯委員會『科技史文集』第七集（上海、一九八一年）八〇頁
- ㉒ 但し、ここで言う北方系・南方系という言葉は、鏡の流通地域の片寄りを言っているのであって、北方に神獸鏡が全く無かったというような極論を述べているのではない。
- ㉓ ここで言う南方系の神獸鏡には三角縁神獸鏡を含めていない。三角縁神獸鏡という鏡は、伝統工芸としての鏡製作の枠組を既に逸脱しており、その特異な文様と通称「同範鏡」の異例の多さを考え合わせれば、できの悪い二流工人の寄せ集めが、短期集中生産という制約下に製作した鏡と考えるのが最も妥当である。他鏡と全く同一の扱いで「中國鏡」として扱う事はとんでもない。筆者自身は、小林行雄氏の従来の説とは全く異なる考え方から、「魏の鏡」と限定できると従来より考えている。

五 日本出土例

前節では双頭龍文（位至三公）鏡の年代観と性格を述べた。次にその分析に基いて、日本出土例に目を向けてみたい。日本出土例は一四例ある。^①

- (弥生)
- ① 佐賀県三養基郡中原町原古賀、町南遺跡^②（住居址）
 - ② 福岡県北九州市若松区岩屋、箱式石棺墓（第4図右）
 - ③ 福岡県北九州市八幡西区馬場山字荒手、馬場山遺跡四一号a土壙墓^④（第4図左）
 - ④ （仿製）岡山県津山市高田樋ノ池附近^⑤（第5図）
 - ⑤ (古墳) 三重県一志郡嬉野町一志、筒野一号墳^⑥
 - ⑥ 佐賀県東松浦郡浜玉町谷口、谷口古墳^⑦（第6図）
 - ⑦ 島根県八束郡玉湯町玉造、玉造築山古墳^⑧
 - ⑧ 山口県山口市下宇野令赤妻、赤妻丸山古墳^⑨
 - ⑨ 岡山県総社市隨庵、隨庵古墳^⑩（第7図）
 - ⑩ 大分県臼杵市下北津留、臼塚古墳^⑪
 - ⑪ 佐賀県佐賀郡大和町久留間、男女神社西南古墳群^⑫
 - ⑫ 大阪府堺市百舌鳥赤畑町三七三、カトンボ山古墳^⑬
 - ⑬ 大阪府堺市浜寺船尾町高月、高月二号墳^⑭
 - ⑭ 大阪府堺市浜寺元町六丁目、塔塚古墳^⑮



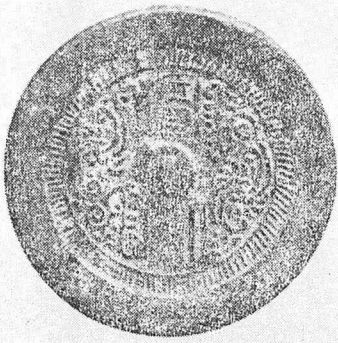
第4図 左：馬場山遺跡（Ⅰ式）、右：岩屋箱式石棺（Ⅱ式）

他に時代不詳の日本出土例が八例ある。（奈良県^④・神奈川県^⑤・福岡県^⑥・滋賀県^⑦・大阪府大島郡^⑧・大阪府藤井寺市道明寺^⑨・香川県大川郡長尾町^⑩・福岡聖福寺^⑪）

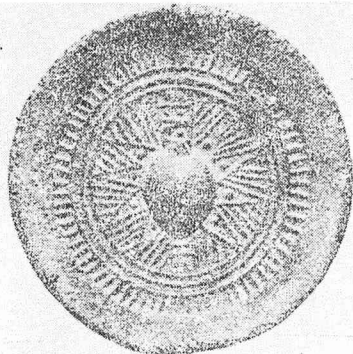
①の町南遺跡出土鏡は弥生後期の住居址より出土している。それ以上の詳細を知り難い。補修孔のある小破片で、片方の胴体の一端と無角龍の頭部が確認できる。第2図—D—Gのいずれかに相当する。界圏線が3本あり、かつ真中の一本が幅広に表現されており、明白なⅡ式の特徴を示している。復原径も一〇・一cmとⅡ式として手頃になる。

②の岩屋箱式石棺出土鏡（第4図右）もⅡ式に属する。遺跡の実体がわからない。胴体中央の突起が両側ともに残り、無角龍の頭部がはっきり残り、有角龍の頭も類推ができる。第2図—D—to近しい。界圏線三本中の中央の一本が幅広になり、復原径も九・九cmとⅡ式の枠内に入る。

③の馬場山遺跡出土鏡（第4図左）はⅠ式に属



第6図 谷口古墳（Ⅲ式）

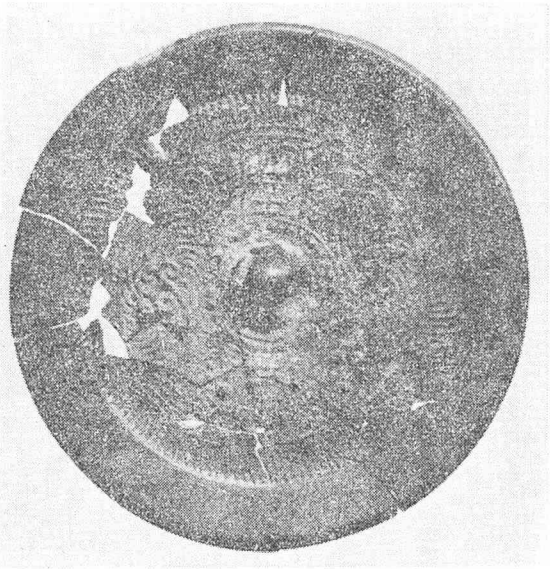


第5図 津山市樋ノ池付近（仿製）

する。弥生後期としか知られない。外周に復原数一八の連弧文帯がある。胴体中央の突起が両側ともに残っており、有角龍の頭部がこれに接して見えている。^③第2図ⅠCに最も近い。反対側の頭も恐らく龍と思われる。復原径約一四cmと、Ⅰ式の枠内に収まる。

④の津山市出土鏡（第5図）は仿製であるが、論旨に関連するので取上げた。詳しい遺跡年代はわからない。外周より素文縁・斜行櫛歯文帯・界圏線三本と続く内区は紐を挟んだ二本の平行線で二分され、片側に四つずつ星形文が描かれて、のこりの空間が細線と珠点で埋められている。高倉洋彰氏が述べられた様に、「位至三公」鏡の背面構成をかなり忠実に写しており、その仿製鏡としてよからう。^⑤特に界圏線が二本ではなく三本引かれている点から考えてその仿製の原鏡となつた鏡はⅡ式であつた可能性が一番強い。^⑥

なお、福岡県京都郡犀川町山鹿二号箱式石棺出土鏡^⑦（第1図Ⅰ4）は、紐を間に挟んだ直線によって内区を二分する形を取つてはいるが、むしろ獣首鏡のくずれと言ふに近い。四方に張り出す糸巻座のうちの二方が、紐を間に挟んだ銘帯風の直線に置き換つている。この点は界圏線を二本引くやり方と共に、助王里出土鏡（第1図Ⅰ3）と大変良く類似している。この助王里出土鏡の獣首表現は、魏の甘露四・五年鏡（A. D. 259, 260）よりも、永寿二年鏡（A. D. 159）・延熹九年鏡（A. D. 166）など二世紀後半の紀年鏡のそれにむしろ近い。「界圏線を二本引くやり方や雲状文の先端の巻き方などの細かい点にも同様の事が感じられる。鈕の形状を



第7図 随庵古墳(Ⅲ式)

考慮しても、なお二世紀の枠内に収まるものと考えている。

一方、古墳出土鏡一〇面は、破損・銹などで文様が見えにくいものが多いが、管見の限り全てⅢ式に属する。⑤・⑨・

⑩・⑭の四面は風冠形の頂部に龍の額・上鄂の名残りの表現が残り、有角龍の角の先端の名残りの蔵手が明瞭に認められる。第2図—L・Mに相当する。⑥・⑧は風冠形の表現が最

も便化した形になり、蔵手も見えず、第2図—Oに最も近い出土した古墳の年代との関連で言えば、⑥の谷口古墳出土例(第6図)が文様の的に新しく、⑨の随庵古墳(第7図)・⑩の白塚古墳・⑭の塔塚古墳出土例が旧いという結果になり、全く対応していない。古墳の実年代を考慮すれば、これもあり得べき結果と言えよう。

土鏡の型式に差異がある事にすぐに気付かれる。弥生出土鏡は石ヶ坪箱式石棺出土鏡を仮にⅠ式とみなしても、全てがⅠ・Ⅱ式又はその仿製鏡の範囲に収まり、Ⅲ式の例が無い。わずかな数量の中での話でもあり、筆者にも資料の見落しがあるかもしれないが、弥生出土鏡と古墳出土鏡に型式差が考えられる事に着目しておきたい。中国出土例の分析によって、Ⅲ式のうちの最も文様のくずれるものが既に後漢代に出現している事が確かめられているので、Ⅲ式自体の初現時期もごく常識的に二世紀後半のどこか(恐らくはその後半)にある事が考えられる。弥生出土鏡と古墳出土鏡がこの鏡においては、弥生出土鏡にそのⅢ式を含まず、二世紀後半を弥生出土鏡の下限とする形で区別される事は重要であろう。^②

また、この式の鏡に止まらず、広く弥生出土鏡全体を概観してみても、確実に三世紀以後の鏡としなければ解釈のつかない鏡はこれまでの所見出せない。これは通称位至三公鏡の再分析を目標とする本論だけからは導き出せない事でもあるので、一つの推論と断って述べておくが、広く弥生出土鏡全体も二世紀後半にその下限があるのではないかと考えている。またこの鏡が北方系の鏡であるという点も、日本への流入経路の面から興味深い。

① 未確認例・未報告例はいずれも論旨に影響しないので外してある。

なお、筆者の努力不足による資料の見落しが当然考えられるので、御教示を頂ければ幸いである。

- ② 佐賀県立博物館『地下の遺宝』（佐賀、一九七九年）三九頁
 ③ 北九州市遺跡分布調査団『北九州の埋蔵文化財』（北九州、一九七六年）

- ④ 高倉洋彰「鏡」『三世紀の考古学』中巻（東京、一九八一年）図三一—四

- ⑤ 樋口隆康『古鏡図録』（東京、一九七九年）図版一九四（No. 386）
 ⑥ 三重県教育委員会『三重考古図録』（東京、一九五四年）図版四二—二

- ⑦ 後藤守一『漢式鏡』（東京、一九二六年）第三三二—三三三図

- ⑧ 梅原末治「玉島村谷口古墳」『佐賀県文化財報告』第二輯（佐賀、一九五三年）図版一一—二、註⑤図版八一（No. 162）

- ⑨ 浜田耕作編『出雲上代玉作遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学
 研究報告第一〇冊（東京、一九二七年）図版二—上

- ⑩ 弘津史文『防長漢式鏡研究』（山口、一九二八年）図版二一、註⑤
 図版八〇（No. 160）

- ⑪ 総社市教育委員会『隨庵古墳』（京都、一九六五年）図版四—二、
 註⑤図版八〇（No. 161）

- ⑫ 賀川光夫『大分県の考古学』（東京、一九七二年）第一〇〇—〇〇四

⑬ 註⑦に同じ。

- ⑭ 古代学研究会『カトンボ山古墳研究』古代学叢刊第一冊（京都、一九五三年）図版一

- ⑮ 森浩一「和泉国高月古墳調査報告」『古代学研究』第五号（大阪、一九五一年）三〇頁

- ⑯ 森浩一編『シンボジウム古墳時代の考古学』（東京、一九七〇年）二五九頁

- ⑰ 後藤守一『漢式鏡』（東京、一九二六年）二〇三—三九二頁
 同右、二〇三—五五二頁

- ⑱ 同右、二〇三—七〇九頁

- ⑲ 中村鉄青『和鏡の研究』（東京、一九六一年）図版六
 ⑳ 大場磐雄『鑑鏡』日本考古図録大成第二輯（東京、一九二九年）図版三四、註⑥図版八一（No. 164）

- ㉑ 『日本における古鏡発見地名表・近畿地方』（一九七七年）三〇頁

- ㉒ 『日本における古鏡発見地名表・四国』（一九七六年）一四頁

- ㉓ 高橋徳自「銅剣銅銚考（二）」『考古学雑誌』第六卷第二号（東京、一九一六年）口絵写真

- ㉔ 復原位置に若干の狂いがある。
 ㉕ 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第五十八卷第三号（東京、一九七二年）二〇〇頁

②⑥ 高倉氏が、この鏡と「位至三公」鏡との間に「時期的な不一致がある」とされる点には同意し難い。高倉洋彰「鏡」『三世紀の考古学』

中巻（東京、一九八一年）二二二頁

②⑦ 第二節註⑤に同じ。

六 おわりに

以上、従来位至三公鏡と呼ばれてきたこの式の鏡に種々の分析を加えてみた。ともすれば「魏晉鏡」・「六朝鏡」という概念でくくられてしまいがちなこの鏡も、神獸鏡・獸首鏡・夔鳳鏡と並んでやはり二世紀前半にその初現があった事を確かめた。二世紀前半という時期は、東漢代における鏡の文様の一つの転換期であったと言えよう。ただ、この二世紀前半の時点で登場する鏡が三世紀以降においても主要な鏡式として依然製作され続けている事実は、戦国後期・西漢前期・西漢後期・東漢前期・東漢後期とほぼ一世紀単位で定期的な大きな変化を示していた鏡式の変遷に停滞が起った事を示しており、改めて魏晉以降の作鏡の実態を考え直す必要があるように思われる。

終りにあたって、この鏡の名称の問題に一言触れておきたい。この鏡は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を通じて一つの文様の変遷過程が辿れるものであり、鏡式として設定する場合にも、筆者の分類のⅠ・Ⅱ・Ⅲ式を一まとめに促える事が最も相ふさわしいものと考えられる。従って、この鏡は位至三公というような、Ⅲ式に特に多数みられる銘文を名称として冠するよりは、内区主文に基いて双頭龍文鏡と呼称する事が、文様に即し原則に即してよりふさわしいものと考えられる。

Ⅰ式の中には頭が龍ではない獸・鳳の表現になるものも若干含まれてはいるが、多くはない。これを一括して扱ってもさして問題にはなるまい。又、中国鏡の文様としては、胴体の片方の先端に二つ以上の頭をつけた、言わばヤマタノオロチ風の龍は存在しないので、「双頭龍文鏡」という名称で他鏡を連想混同される心配はまずないと思われる。「双龍鏡」では二頭の盤龍鏡や春秋鏡・前漢鏡の一部に見られる龍二匹を主文とする鏡との混同が気になるし、「双獸鏡」では

②⑧ もし仮にⅢ式が弥生遺跡から出土した場合には、それはまた別の意味で問題が複雑になろう。なお、この節における弥生・古墳の時期区分の粗さに対しては、日本を専門とされる方からの御不満が予想される。資料の制約もあり、今後の課題としておきたい。

龍鏡」と同様の問題がある上、龍文が主役になっている事を表現できない。以上の考えから、筆者分類のⅠ・Ⅱ・Ⅲ式を一まとめとして促え、これに双頭龍文鏡の名を冠する事を僭越ながら提案しておきたい。

筆者自身は、位至三公という名称を今後とも使用する事は学問的に得策ではないと考えた上で、以上の様な提案を行なった。ただ、これをきっかけとして、多くの研究者がこの鏡にてんてんばらばらの名称をつけはじめるとなると、以上は、かえって別の問題が起って逆効果になりかねない。この点をとくと御配慮の上、先学諸氏の御意見を賜わりたい。

鏡の研究は、その歴史の古さの割には、まだまだ目の行き届かない点が多く残されている。系統的・体系的な分析の積み重ねが何よりも緊要とされよう。

〔付記〕 本稿は一九七三年度の京都大学文学部におけるレポート並びに一九七五年度の京都大学大学院における演習発表に加筆したものです。私事の為に発表が遅れましたが、御指導いただいた小林行雄・樋口隆康・小野山節先生はじめ、研究室諸先輩の学恩に謹んで感謝の意を表します。

（進平門学院大学非常勤講師、

）

A Genealogy of the Bronze Mirror *Sôtôryûmon-Kyô*

双頭龍文鏡 or *Ishisankô-Kyô* 位至三公鏡

by

Toshinori Nishimura

The form of the bronze mirrors called *Ishisankô-kyô* is one of the typical in China after the latter half of the 2nd century. The motif of the main pattern of these mirrors has not been identified. But analyzing them minutely, we can trace back the process of the deformation of their pattern. The original motif is found to be *Sôtôryûmon*: a motif of a dragon with two heads at both ends. So I advocate that the name of these mirrors should be changed to *Sôtôryûmon-kyô*. And this process not only began in the 2nd century but also finished in the same century.

As regards *Ishisankô-Kyô* dug up in Japan, I've also considered those in the *Yayoi* 弥生 period and *Kofun* 古墳 period is clearly separated. As compared with the mirrors in the *Kohun* period, those in the *Yayoi* period have only the patterns less deformed.